乙女ゲームの悪役なんて どこかで聞いた話ですが 5

柏てん
Ten Kashiwa

RB
レジーナ文庫

クェーサー

闇の精霊使いの一族の末裔(まつえい)。
メイユーズ王国を滅ぼそうとしている。

シリウス

魔導省の長官。
その正体は、天界から人間界にやってきたエルフ。

カノープス

メイユーズ王国の近衛隊長。
仕事熱心で真面目なエルフ。

ミハイル

騎士団員。戦術の天才。
俺様気質で、周囲の人間をよく振り回す。

ゲイル

騎士団員。ミハイルの側近。
強面(こわもて)だが、おおらかで優しい性格。

ヴィサーク

リシェールの契約精霊。

ラーフラ

気まぐれな木の精霊。

リシェール

乙女ゲーム世界の悪役に転生した少女。
ひょんなことから悪役ルートの回避に成功したが、トラブル三昧の日々を送る。
メイユーズ王国を守るため、体を成長させたのだけど……？

シャナン

メイユーズ王国の王子。
本来の姿を取り戻し、リシェールのことも思い出したが……？

アラン

メリス侯爵家の現当主。
リシェールの実の叔父。

子ども姿のリシェール

登場人物紹介

目次

乙女ゲームの悪役なんてどこかで聞いた話ですが５　7

書き下ろし番外編
ヴィサークの思うこと　329

乙女ゲームの悪役なんてどこかで聞いた話ですが５

1周目　物語は動き出す

まさか本当に体を成長させることができるなんてね。

私は、目の前にある鏡をまじまじと見る。そこに映っているのは、痩せた二十歳くらいの女性だった。床につくほど長く伸びた黒髪に、青灰色の瞳。体にシーツを巻きつけただけという姿だ。

これは私――リシェール・メリスが成長した姿である。

前世で普通のＯＬだった私は、車の運転中、道路に飛び出してきた子どもを避けて電信柱に激突した。そしてそのまま命を落とし、前世でプレイしていた乙女ゲームの世界に転生したらしい。

ちなみに、そのゲームは『恋するパレット～空に描く魔導の王国～』というべたべたな名前。当時は略して『恋パレ』と呼ばれていた。

ゲームに登場するリシェールは、ヒロインの恋敵――つまり悪役だ。しかも物語の結末で必ず不幸になるタイプの、かわいそうな役回りである。

そんな悪役に転生した私は、王都のスラム街に当たる下民街で生まれ育った。

そこで母と暮らしていたのだが、五歳の時に母を亡くした。それがきっかけで秘めていた強大な魔力を暴走させ、私は前世の記憶を取り戻したのだ。

その後、私の強大な力を利用しようと考えた実の父――メリス侯爵に引き取られたものの……

強すぎる魔力に体が耐えきれず、寝台の上で毎日苦しむばかりだった私。

そんな私を救ってくれたのは、ここメイユーズ王国の王太子であるシャナン殿下だ。

そして殿下だけでなく、ほかにもたくさんの人達に助けてもらい、今はリル・ステイシーと名乗って、新しい人生を送っている。

こうして図らずも悪役令嬢ルートを回避した私だったのだけれど――

私の前には今、別の困難が立ちはだかっていた。

私達の暮らすメイユーズ王国は、現在、闇の精霊使いクェーサーによる呪いに蝕まれている。エルフのシリウスがその呪いを抑えてくれているものの、彼は瀕死の状態にあった。

私にとっても、この国にとっても、シリウスはかけがえのない存在だ。

なんとかして彼を助けたい。

けれど、私もまたのっぴきならない状況にある。クェーサーは、どうやら私を狙っているようなのだ。

私の母は、闇の精霊使いの一族アドラスティアの末裔だったらしい。つまり、私もまたその血を引いているということ。

この国にかかった呪いはまだ完成しておらず、完成させるためには、強大な魔力とアドラスティアの血が必要となる。クェーサーは、私を使ってこの国を滅ぼすつもりでいるのだ。

一刻も早くシリウスを助けたい。でもその前に、まずクェーサーの手から逃れなければ――

そう焦る私に、助言をくれた人物がいた。それは、アドラスティアの血を引くパール・シー。彼女は私に、大人の体を手に入れなさいと言った。

その言葉が意味するところはまだわからないけれど、私は彼女の助言に従うことにした。時の魔導を使うベサミ・ドゥ・テイトの協力を得て体を成長させたのだ。

私は再び鏡に映る自分を見つめ、それから、傍らにいる男性に目を向けた。小麦色の肌をしていて、白銀の髪からは獣耳がのぞいている。彼は契約精霊のヴィサ君ことヴィサーク。人型を取った彼は、心配そうな表情を私に向けていた。

そんなヴィサ君の横には、木の精霊ラーフラが浮かんでいる。相変わらず、まりもにそっくりだ。

二人は、意識を失った私が目覚めるのを、待っていてくれたらしい。

「ヴィサ君、ラーフラ。私、とりあえずミーシャのところへ行ってくるね。そばにいてくれてありがとう」

体を成長させるという第一ミッションはクリア。でも、突拍子のないことをしてしまった私は、養母のミーシャに事情を説明しなくちゃいけない。それに、服も貸してほしい。

「俺も行く！」

「ヴィサ君は待ってて」

彼は精霊だけど、今は成人男性の姿だ。着替えることを考えると、同行はご遠慮願いたい。

しょんぼりしつつ頷いたヴィサ君にお礼を言うと、私は自分の部屋を出た。

向かうはミーシャの寝室だ。

シーツを纏った姿で、廊下をおそるおそる歩く。幸運なことに誰とも会わなかった。

ミーシャの部屋の扉の前に立ち、私は深呼吸をする。

どんな風に説明すれば、私がリルだとミーシャに信じてもらえるだろうか？
成長する前と同じところなんて、髪と目の色ぐらいだ。
それ以外は、すべて違う。身長はミーシャと同じぐらい。伸びすぎた髪は床についているし、無理に成長したせいか、体はがりがりに痩せている。
驚くのは間違いない。信じてもらえないかもしれないけれど、とにかく話してみるしかないだろう。
おそるおそる扉をノックしたが、返事はなかった。
眠っているのかと思い、静かにドアノブを回す。病弱な彼女は、たいていベッドの中にいるのだ。
部屋の中を覗くと、薄暗く、そして静まり返っていた。
天蓋付きのベッドの上で、布団が少しだけ盛り上がっている。
それがわずかに上下するのを見て、私はほっとした。
「ミーシャ、眠っているの？」
そう声をかけたら、布団がもぞりと動く。
「リル、なの？」
布団から、美しく儚げな女性――ミーシャが顔を出す。

「……そうだよ」
覚悟を決めてベッドに近づくと、ミーシャは一瞬息を詰めた。見知らぬ人物が入ってきた、と警戒しているのかもしれない。
どう説明しようか悩み、言葉が続かなかった。
部屋はしばし静まり返ったが、先に口を開いたのはミーシャだった。
「いつまで経っても目を覚まさないから、心配したじゃない！」
そう言うや否や、彼女は勢いよく体を起こして咳きこんだ。私は慌てて彼女に駆け寄り、背中をさする。
するとミーシャはぎゅっと強い力で私を抱きしめた。
ただ、先ほどの彼女の言葉の意味がわからない。
私は、ベサミから受け取った「時の魔導の矛盾」を使って体を成長させた。これは、シャナン殿下の体の成長を止めていた時に生じた矛盾だ。
とてつもない力がこめられた「時の魔導の矛盾」――それを呑みこんだ私はその力を受け止めきれず、しばらく気を失っていたようだ。とはいえ、それも数時間のことだと思っていた。だって、部屋も屋敷も、前に見た時と何も変わってなかったし……
「どういうこと？」

「それはこちらのセリフよ。半年近くも目を覚まさないなんて！」
「は、半年!?」
「そうよ。緑色の変な男の人が部屋に入るなって言うから、リルの無事を確かめることもできなかったの。本当に本当に心配したんだから。なんだかずいぶんと成長しているけど、無事ならとにかくよかったわ！」
緑色の男というのは、ラーフラのことだろう。まりもの姿でいることが多いけど、彼は人型だと緑髪の男性だ。いや、それより――
「いいいい、今何月なの!?」
「今日から黒月よ」
その言葉に血の気が引いた。黒月とは、前世で言うところの十月。私が時の魔導の矛盾を呑んだのは緑月――五月だった。まさかそんなに眠っていたとは……
クェーサーがこの国にかけている呪術は、一族の祖であるアドラスティアを復活させ、この国を滅ぼすというもの。ミーシャの様子からすると、術はまだ完成していないようだが、今は一体どういう状況なのだろうか。
シリウスやシャナン王子も、どうなっているか――
慌てて部屋を出ようとしたら、ミーシャに引き留められた。

その拍子に、体に巻いていたシーツがはらりと落ちる。
「まったく。そんな格好でどこへ行くつもり?」
そう言うと、彼女は手元にあった呼び鈴を鳴らした。
びくびくしながら待っていると、すぐに古参の侍女がやってくる。
彼女は私の存在に驚いていたが、よけいなことは言わず、ミーシャの指示に従って私を着替えさせた。
着せてもらったのは、ハイウエストのワンピース。ミーシャの髪色と同じペールブルーで、優しい印象だ。
「もうレディになるのだから、私が切るわけにはいかないわね」
ミーシャはずっと私の髪を切ってくれていた。けれど今日は侍女に散髪を頼み、傍らで私を見守ってくれる。
伸びすぎた髪は腰のあたりで切り揃えられ、丁寧にくしけずられて結われる。さらに侍女は淡く化粧まで施してくれた。
身ぎれいにしてもらった私は、貧相なことは変わらないが、なんとか見られる姿になっていた。
「素敵ね。でもあなた、ちょっと痩せすぎよ」

ベッドに腰かけ、ミーシャはそう言って笑う。
突然成長してしまった養女に対して、彼女はなんて寛大なのだろう。私がリルだとわかってくれたことにも驚いたけど、彼女の肝の据わりっぷりもすごい。
彼女はこういう突然の事態に強い。幼い頃から病を患っているからか、儚げな外見に反して芯が強いのだ。
「さあて。落ちついたところで、どういう事情なのか話してもらおうかしら？」
侍女を下がらせ、ミーシャはそう言って首を傾げた。
この国とシリウスを守るために体を成長させたことをざっくり説明すると、ミーシャは眉根を寄せる。
「まったく。テイト卿にも困ったものね。子どもにそんな危険なものを渡すなんて」
ミーシャがまず怒るのは、その部分に関してらしい。
「でも、私から頼んだんだから、ベサミ様は悪くないよ。いきなり無茶を言って困らせたのは、私の方なんだし……」
「とはいえ、この国にかけられた術とやらをどうにかするのは、大人の仕事でしょう？どうしてリルがそんなことをしなくちゃならないの？　ありえないわ」
ミーシャが興奮してきたので、私は慌てて彼女をなだめる。体に障るからあまり興奮

させないように、とお医者様にしつこく言われているのだ。
「いいの。自分で決めたことだもん。でも、体を成長させたあと、一体どうすればいいのか……」
パールから受けた指示は、体を成長させることだけ。話はそれからだと言われた。
なんとか彼女とコンタクトを取らなくてはいけない。
「ちょっと待って」
そう言うと、ミーシャは侍女を再び呼び出し、何事か言いつけた。
侍女は部屋を出たが、間もなく戻ってくる。そして白い封筒をミーシャに差し出した。
「あなた宛に来ていた手紙よ。差出人の名前がなかったから、どうしようかと困っていたの」
ミーシャから渡された封筒には、ただ私の名前だけが綴られている。
中には一枚の便箋が入っていた。
その文面に目を走らせ、私は言葉を失う。
「なっ」
手紙はパールからだった。
そして『クェーサーの企みを阻止するには、純潔を失うべし。術には漆黒の乙女の血

が必要』と書かれている。
純潔とは、まさかあの純潔か。
だからパールは、体を成長させるようにと言ったのか。
いや、しかし九歳の子ども相手になんてことを言うんだ……
呆然としている隙に、ミーシャが私の手からさらりと便箋を奪っていく。
慌てて止めたが、間に合わなかった。
「まあ……」
ミーシャは無邪気な顔をしかめ、汚らわしいもののように便箋をつまんだ。
「これ、本当なの？　あなた、騙されてるんじゃない？」
彼女の疑問はもっともだ。パールの言葉に根拠はない。
しかしだからといって、何もしないわけにもいかない。
クェーサーの術について知っているのは、パールのみ。ほかに頼るアテはないのだから。
私には前世の記憶があり、精神年齢は立派に三十代だ。もしその行動が必要不可欠なのであれば……覚悟を決めようと思う。とはいえ、体が大人になったって、みんなからしたら九歳の少女だ。それで『純潔を失う』なんて、反対されるに決まっている。
ミーシャは今まで、私が行うどんな突拍子のないことも、温かく受け入れてくれた。

いつだって私を信じてくれた。
だから——今、私は腹を括る時なのかもしれない。
墓まで持っていくつもりだったけれど、信じてもらえないかもしれないけれど、ミーシャに話してみよう。
「ミーシャ。あのね、聞いてほしい話があるの」
「なあに、リル」
ミーシャはいつもの調子で答えてくれる。
私はぎゅっと手を握った。緊張で体が熱くなり、手のひらがじっとりと湿る。
「何言ってるのって思うだろうし、信じられなくて当然だと思う。でもね、頭がおかしくなったわけでも、嘘をついているわけでもなくて、本当のことなの。あのね、私……」
まくしたてるように早口でそこまで言って、息を吸った。そして——
「私、前世の記憶があるの」
その言葉を聞き、ミーシャは目を丸くする。
私は焦って、次々と言いつのる。
「前世ではもう大人でね、仕事もしてたんだけど、事故で死んじゃって。前の世界はこの世界と全然違う、魔力もない世界。でもちょっと似てるところもあるし、食べ物は近

いものもあるから、前世で好きだったものを作ってみたりしてね。みんなに異国のものだって言ってきたものは、だいたい前世のものを再現したんだよ……っ！　えっと、だから何が言いたいかっていうと、私、本当は中身も大人なの！」

ほとんど息継ぎせず言いきった。

そんな私を、ミーシャはまん丸の目で見つめている。

――無理だ。さすがに信じてもらえない。

目の前が真っ暗になった気がした。覚悟はしていたものの、ショックが大きい。

すると、ミーシャが大きなため息をこぼした。

「なるほど、そういうわけだったのね」

「……え？」

「ずっと不思議だったのよ。リルって普通の子どもと違うでしょう？　誰も思いつかないようなことを知ってるし、大人顔負けの思考力と判断力だし。頼れる大人がいなかったから、こうなったのかしらと思ったけれど――そういうことなら納得だわ」

あっけらかんとしたミーシャの言葉に、私はぽかんとする。

ぱくぱくと口を開けたり閉じたりするだけで、声が出ない。

だって、こんなにあっさり信じてもらえるなんて、ありえるのだろうか。むしろわけがわからない！

「……え……、あの……ミーシャ？　私が嘘をついているかも、とか思わないの？　すっごくおかしなことを言ってるよ、私？」

「リルが変わったことを言うのは、前からでしょ。それに、嘘を言っていないのは、目を見ればわかるわ。もう四年もあなたの母親をやってるのよ？」

笑みを浮かべたミーシャの声は、なんだか力強い。

私は思わず彼女に抱きついた。

「ありがとう、ミーシャ」

「こちらこそ、話してくれてありがとう。……それで、リルはどなたかに純潔を捧げに行くの？」

ストレートな言葉に、私はたじろいだ。

「う……はい……。だって、私が今できることは、それしかないから」

「そう……。正直ね、リルにそんなことをさせるのは、抵抗があるわ。たとえ体が大人になって、中身も大人だったのだとしてもね。でも、あなたが自己犠牲の精神だけで行動するわけではないのなら――止めないことにする」

「え？」

私は首を傾げる。ミーシャは何が言いたいのだろう。
「相手のことをリルが本当に思っていて、その方もリルを大切にしてくれるのなら、応援するわ。けれどもこの国のためだけに純潔を捨てに行くのなら――屋敷から出すわけにはいきません。いい？」
それは強い母の宣言だった。
私は感動して声を出せず、ただ頷く。
するとミーシャは無邪気に笑った。
「やっぱり、リルには好きな人がいるのね」
「うん……って、え!?」
「誰かしら？　私の知っている人？」
「そ、それは……」
別に隠すようなことでもないが、なんだか恥ずかしい。
けれどミーシャがあまりにも嬉しそうに尋ねてくるものだから、私はその質問から逃げられなくなった。
「ミ、ミハイルだよ」
ミハイルは乙女ゲームの攻略対象の一人であり、赤髪の騎士団員だ。養父母であるゲ

イルとミーシャ同様、四年前から私の面倒を見てくれている。一緒に過ごすうちに、彼は私にとって特別になっていたのだ。
そう言うと、ミーシャは目を見開いたあと、にっこりと笑った。
「そうだったのね！　あの方なら安心だわ」
予想外の反応に、今度はこちらが目を丸くする。
驚いていると、ミーシャは私の肩に力強く手を置いた。
「行ってきなさい。あなたはとてもきれいだから、自信を持って。――伝わらなかった時には、ヤケを起こさず帰ってきてね。ほかに解決策はないか、私も一緒に考えるから」
ミーシャに後押しされ、私の心は固まった。
今すぐ、ミハイルのところへ行こう。
驚かれても、手酷く拒絶されても、あきらめない。
ミハイルのことが、私は大好きなのだから。
涙をこらえて精一杯頷くと、私はミーシャの部屋を飛び出した。
屋敷から出た私を待っていたのは、ヴィサ君とまりも――ラーフラだった。
さっきまで人型だったヴィサ君は、いつもの小さな獣姿に戻っていた。猫とも犬とも言える、シーサー似の姿だ。

それを見て、私は正直ほっとした。
「リル、着替えたんだな」
私のもとへ飛んでくるヴィサ君を抱きしめると、ふわふわの体から太陽のにおいがする。
半年近くも眠っていたと聞かされたからだろうか。その感触が妙に懐かしく感じられた。
「王子は命に別状がないようだ。お前が眠っていた間、国に大きな変化もない」
まりもが大儀そうに言った。そして、無言でじーっと見つめてくる。
「よかった……ありがとう、ラーフラ」
お礼を言うと、ラーフラは満足したように頷いた。
どうやら感謝待ちであったらしい。彼もずいぶん人間に馴染んだなあ。
とその時、ヴィサ君が真剣な声で私を呼んだ。
「リル」
私は思わず固まった。そういえば、目覚めたばかりの時に、人間界を捨てようと持ちかけられたんだった。
ヴィサ君が私を大切に思っているからだとわかってはいるが、私にはそんなことできない。だから断ってしまったのだけど――

一人と一匹の間に、気まずい沈黙が生まれる。
「ヴィサ君、あのね……」
言いよどんでいると、ヴィサ君が小さく笑った。
「わかってるよ。どこへでも連れてってやるから、乗れって」
そう言うと、彼は大きな獣の姿に変身した。私はほっと安堵の息をつく。
この世界で悔いのないように生きたいと言った私を、彼は受け止めてくれた。それだけでなく、手助けまでしてくれる。いつだってそうだったように。
私は泣きたくなった。
彼の寛大さに甘えるばかりの私は、少しでもヴィサ君に何かを返せているのだろうか？
「ありがとう。ごめんね、ヴィサ君」
「いいって。どんな状況になっても、俺がリルをずっとそばで守り続けるのは変わらないんだから」
大きな獣が、照れたように背中を向ける。
私はその背を何度も撫でてから、ゆっくりとまたがった。

「リル、横乗りになれ。せっかくきれいな格好してるんだから」
ヴィサ君がぶっきらぼうに言う。どうやら照れているらしい。
私は慌てて片方の足を引き抜き、横乗りになった。
「それで、どこに行くんだ？」
「それは――」
私が場所を指定すると、ヴィサ君は気に食わないと言いたげに鼻を鳴らした。

しばらくして、私達はメリス邸に到着した。ミハイルの実家に行ったら、彼はここにいるはずだと聞かされたからだ。
メリス邸に着くと、ヴィサ君は少し散歩をしてくると言って、まりもを引っ張って行ってしまった。そんな彼の心遣いが、とてもありがたい。
兄のアランが当主となったメリス侯爵家は、現在、借金返済のために屋敷をホテルに変え、メリスホテルとして営業している。ホテルの正面入口は、フットマンと宿泊客でごった返していた。私がいない半年の間も無事に営業できていたようで、ほっとする。
胸を撫で下ろしつつ、目立たないよう裏口から中に入った。
夕刻が迫っているからか、メイド服姿の従業員達が忙しく動き回っている。

誰にも見咎められないよう、こっそりとバックヤードを抜けて廊下に出た。
今の私の姿なら、宿泊客だと言えばなんとかなるだろう。ミーシャのおかげで、身なりはきちんとしているはずだ。
この家の間取りなら、誰よりも知っている。
とりあえず、オープニングセレモニーの際にミハイルが宿泊していた客室に向かう。
ミハイルの実家の使用人の話では、彼はこの五ヵ月間、家に戻っていないのだそうだ。
騎士団に出仕する時も、このホテルから城へ向かうらしい。
なぜだろうかと考えながら、飴色の廊下を進む。
連泊客専用のエリアにある目的の部屋には、掃除不要の札が下げてあった。
何度もためらってから、私はその扉をノックした。
もちろん今は、ここがミハイルの部屋ではない可能性もある。そしたら連泊客専用の部屋を虱潰しに探すか、どうにかして宿泊名簿を盗み見るか……
それにしても、決心して来たはずなのに、この期に及んで足がすくむ。
ミハイルに部屋にいてほしい気持ちと、いてほしくない気持ちが、同じ重みで圧しかかってきた。だって今から、体を成長させたことや前世のこと、純潔を捨てる必要があるという話までしなくてはいけない。

心臓が、胸を突き破って外に飛び出しそうだ。
部屋の中から物音がして、心臓が一際大きく跳ねた。
この姿を、どう説明しよう？
どんな言葉で、好きだと伝えよう？
そして国を守るために、今すぐに抱いてほしい、なんて――言えるだろうか？
今まで子どもだからと甘えて、好き勝手言ってきた。
困らせるだろうし、最悪、手酷く拒否される可能性だってある。
緊張で肩が震えた。
考えすぎて、頭が真っ白になる。
キイと蝶番のきしむ音がして、扉が開いた。
「ようこそいらっしゃいました。リシェール・メリス」
そう言って扉の内側できれいに笑ったのは、望む相手ではなかった。
それどころか、見覚えのあるホテルの部屋ですらない。
ただひたすらの闇。そこに白い顔が浮かんでいる。
「クェーサー」
その顔の持ち主の名前を、私は呆然とつぶやいた。

2周目　絡めとる蜘蛛の糸

私は何かに絡めとられたように、その場から動けなくなった。
見知った、けれどできることならこの先一生見たくなかった顔が、そこにあったからだ。
「なんであなたが……」
ようやく出た言葉はそれだけ。
緊張で喉にひどい渇きを感じた。
「ご挨拶だね？　僕に純潔を捧げに来てくれたんだろう？」
この男はどこまで知っているのだろう。
私の脳裏をそんな疑問が駆け抜ける。
だが同時に、それを考えても無駄だとも思う。
クェーサーは失われた古の術に通じている。人間の常識が通じないほど強力な術を扱う男に、そんなことを尋ねるのは愚問だ。
気づけばあたり一面、闇が広がっていた。三年前の内乱騒動で、クェーサーに闇の中に閉じこめられた時と一緒だ。
どんな小さな光も届かない、闇の牢獄。
いや、今はそんなことよりも――

「ミハイルをどこへやったの!?」
甲高い自分の声が、まるで他人のもののように聞こえた。
「はは、心配するのは好きな男のことだけ？　養父のことはいいのか？」
クェーサーが楽しそうに言うのとは対照的に、私は怒りに燃える。
「ゲイルに何かしたら許さない！」
そういえば、家に養父ゲイルの姿は見当たらなかった。
上司であるミハイルと一緒にメリスホテルにいたとしても、おかしくない。
私が眠っている間に、クェーサーはメリスホテルに触手を伸ばしていたというのか。
だとしたら、兄のアランは？
私に協力してくれると約束してくれた友達、ルシアンやアルベルト、レヴィは？
何から尋ねればいい？　尋ねたところで、クェーサーが素直に答えるとは思えないけれど。
「何が、目的なの？」

半ば答えを知りながら、私はまずそう尋ねた。
「おや、すでに知っていると思ったけれどね」
クェーサーがそう言い、不意に白い手を伸ばしてきた。
「その顔、君のお母さんにそっくりだ。アドラスティア様に捧げるつもりだったが、惜しいね」
「お母さんを、知っているの？」
私の母はアドラスティア一族の末裔なのだと、パールに聞いた。母は私にはマリアンヌと名乗っていたけれど、本当の名はリベルタスと言うらしい。
「知っているさ。彼女は名うての殺し屋だった。一族の中でも随一の能力を誇り、いずれ一族の首領になると目されていた。それがどうだ？　忌まわしい大陸の男にうつつをぬかし、あげく、流行病なんぞであっさり死ぬなんてな！　寝床で死ぬような女じゃなかったのに、運命とはわからないものだ」
私を動揺させるための言葉だとわかっているのに、優しかった母が殺し屋だと言われたら、冷静ではいられなかった。
嘘だろう？　そう思うのに、クェーサーのあまりにも自信ありげな態度が心を弱らせる。

私を産む前に母がどんな生活をしていたのか、本人から聞いていない。
「けどなあ、リベルタスには感謝しているよ。なんせリシェール――君を産んでくれた」
「何言って……」
「太古の一族の者同様、強い魔力を持つ君なら、きっとアドラスティア様をよみがえらせることができるだろう。リベルタスも一族の役に立てて本望だろうさ！」
そう言うと同時に、彼の手から放たれた闇の精霊が、私を雁字搦めにする。
「くっ！」
すぐに逃れようともがくが、動くほどにそれは体に食いこむ。
「少し予定は早まったが、君が手に入ったのでよしとしよう」
「待って、ミハイルとゲイルはっ、みんなはどうしたの!?」
咄嗟にそう叫ぶと、クェーサーは不気味なほど優しい笑みを浮かべる。
「無意味に暴れられると手間だから教えておくが、彼らには手を出していない。あの部屋の入口をこの闇の空間につなげて、君が来るのを待っていただけさ。でも君が素直に従ってくれなかったら、これからどうなるかは――わからないな」
安堵で体から力が抜けた。
絶体絶命の事態からは脱していないけれど、大切な人達が無事だと聞いたら冷静にな

れた。
私はもがくのをやめ、クェーサーを見上げる。
抵抗は無駄だというあきらめと、彼の思うままにはさせないという怒り。ほかにも様々な気持ちが浮かぶ。
私は一体いつまで、この男の手のひらの上で踊らなくてはならないのだろう？

そのまま闇の空間に閉じこめられるかと思っていたのに、クェーサーはすぐに移動しはじめた。闇の空間から出ると、そこは現実世界だった。
「また、闇の空間に拘束すると思った？　君には前に、あそこから脱出されちゃったからね。同じ方法をもう一度使うほど、僕は愚かではないんだよ」
以前クェーサーによって闇の空間に捕らわれた時には、光の魔導を使って闇を払い、脱出することができた。
しかし、現実世界だとその方法は意味がない。
いつのまにか闇の精霊ではなく縄で拘束されていた私は、埃だらけの床に転がされていた。
暗くて、埃っぽいにおいがする。板敷きの床に、同じく木の板で覆われた天井。

粗末な建物の中のようで、その天井からところどころ光がもれている。
建物に何か特殊な術がかけられているのか、常に感じているヴィサ君との絆が今は感じられない。
ひどく心細くなってくる。
「それでは、君達にはこの娘の世話を頼みますね。生かさず殺さずで、よろしくお願いします」
そう言って、クェーサーは建物から出ていった。
クェーサーが声をかけていったのは、十歳前後の少年少女達だ。彼らはフード付きのローブを着ており、全員がおそろしいほど無表情だった。
身動きさえしなければ、等身大の人形だと思ったかもしれない。
彼らは生きている人間としての気配が希薄だった。

それから私は、その部屋で彼らに見張られることになった。
彼らはよけいな言葉を口にせず、ただ淡々と私に食事を与える。希望すれば足の縄のみ外されて、トイレに行けた。もちろん、毎回少女がついてくるのだが。
そうして過ごすうちに、私が閉じこめられているのは、隙間風の吹くあばら屋だとわ

かった。監禁生活三日目に雨が降った時には、雨漏りしたほどボロボロだった。家具の類はほとんどない。

しばらくは大人しくして様子を見ることにしたが、そうするといろいろと考えてしまう。

ここはアドラスティア一族の隠れ家なのだろうか？

一族はアドラスティア商会として王都にもぐりこみ、商売だけでなく悪事を働いていた。

すでに王都から撤退したはずだが、ここがアドラスティア商会の持ち物だとすれば、まだ騎士団の捜査に引っかかっていない隠れ家ということになる。

焦りと、クェーサーに利用されるかもしれないという恐怖――私はそれらと戦った。

しかし声を荒らげたり暴れたりすれば、見張りの子ども達の警戒心をあおるだけだ。

私は歯を食いしばって必死に耐える。

手が戒められているので、ペンタクルを描いて魔導を使うこともできない。

しかも、今の私は急激に成長した体に慣れておらず、とてもじゃないが走ったり戦ったりはできそうにない。

ということで、私は自力での脱出ではなく、助けを呼ぶ方法を探すことにした。

この建物を出られたら、私と精神でつながっているヴィサ君ともコンタクトが取れるはずだ。

一度でも失敗すれば警戒されてしまうだろうから、チャンスは一度きり。

とにかく情報が必要だと、私は見張りがかわるごとに彼らに話しかけることにした。

しかし少年も少女も無表情のまま、私の話に返事一つしない。

本来なら外で遊び回っている年頃だろう。

それがこれほど従順にクェーサーの命令に従っているのだ。とてもじゃないが普通じゃない。

唯一反応を示したのは、彼らの中で最も体の小さい少女。首を傾げるだけの、ほんのわずかな反応だったが、私は希望を見出した。

それから私は、彼女が見張りの時に他愛ない話をするようになった。

見張りは一日三交代制で、だいたい二日に一度の割合でその子の番が回ってくる。

私は思いつくまま彼女に話をした。

雨上がりの空が好きなこと。風に揺れる花が好きなこと。

北にある街ヘリテナには温泉というものがあって、毎日熱いお湯が湧き上がってくるということ。

そこに浸かって眺める景色が好きなこと。
何か話していないと、私自身が冷静ではいられなかったのかもしれない。
そのせいか、子どもが興味を持ちそうな話をしようとは思わなかった。
自分を保つため、私は好きなものの話ばかりした。
いつもそばにはヴィサ君という精霊がいて、彼の優しさと、その白銀の毛並みが大好きなこと。
親に見捨てられた自分を引き取ってくれた、養父母が好きなこと。
最初は険悪だったけれど、兄と普通に話せるようになって嬉しかったこと。
そして外の世界には、私の好きな人がいること。
その人の夕焼け色の髪が、私はとても好きなこと――
たくさん話をしたけれど、少女は私の話になんの反応も示さなかった。
それでも私は話し続けた。
捕まってから十日ほど経った、ある日のこと。
目を覚ますと、ガラスもはまっていない簡素な窓の縁に、粗末な器に活けられた花がのっていた。光の粒子に紛れて瑞々しく咲く花は、大好きな夕焼け色。私は言葉をなくしてそれに見入った。

「きれいね……」
思わずそうつぶやくと、間近にいた見張りの少女がほんのかすかに笑った。
それは私が話しかけ続けた、一番年少と思われる少女だった。
その日から、少女はぽつりぽつりと私と話してくれるようになった。
聞けば、名前はないという。アドラスティア一族では十五歳で成人とされ、それまでは一人の人間として認めてもらえないのだそうだ。
そのため、一族の子どもは、四、五人のグループにまとめられ、年長の子どもが年少者の監督責任を持つという。
私を見張っているのも、そのグループの一つらしい。
もし母が私を連れて一族のもとに帰っていたら、おそらく私も同じように母と引き離されていたに違いない。
そう思うと、母が最悪の環境である下民街に潜伏してまで一族に戻らなかったのも、頷けた。
「でも、名前がないと呼びかけることもできなくて不便じゃない？」
私の言葉に、彼女は不思議そうな顔をするばかりだ。
名前を持つことが、ピンとこないらしい。

そんな彼女を、私は痛ましく思った。

「うーん……じゃあ、マリアって名前はどう？　私のお母さんは、マリアンヌっていうの」

母の本名はリベルタスで、マリアンヌという名前はメイユーズ王国に潜入するための偽名だった。

それでも私にとっては、マリアンヌという名前の方が、ずっと慕わしく感じられるのだ。

手足を縛られて床に転がされたまま言うセリフでもなかったが、私が提案すると少女は驚いたように目を丸くし、そしてふっと微笑んだ。

そうしていれば、とても可愛い普通の女の子だ。

光沢のあるダークグレーの髪と、飴玉みたいな桃色の目。彼女の笑顔は、まるで雪解けのあとに訪れた春のように、温かだった。

「マリア……マリア」

そう何度も繰り返しながら、彼女はおそるおそる自分を指差した。

「うん。あなたはマリア。気に入ってくれた？」

「……うん」

そう頷いてあどけなく笑う彼女に、私の胸はズキリと痛んだ。

――私は、彼女を利用してこのアジトを脱出しようとしている。

時は一刻を争う。

なにせ私は、この国を滅ぼそうとするクェーサーの野望を阻止しなければならないのだ。

でも、私が逃げ出したら、そのあと彼女はどんな目に遭うのだろう？

たとえマリアが苦しむかもしれなくても、私には逃げないという選択肢はない。

だから私は、その胸の痛みからそっと目を逸らした。

日が経つごとに、マリアは私に打ち解け、そしていろいろなことを話してくれるようになった。

ほかの子ども達とも、会話はほとんどないらしい。

しかもアドラスティア一族の子ども達は、己の魔力を制御するために、幼い頃から厳しい訓練をしなければならないそうだ。

大人の事情に振り回されながらもひたむきな彼女を見ていると、数年前の自分を思い出す。

彼女もまた、生き残るために必死に戦っている最中なのだ。

そんなマリアから、私は少しずつクェーサーのことを聞きだそうとした。

まず教えてもらえたのは、クェーサーが一族の祖であるアドラスティアの復活の儀式

を行うために闇月――十一月を待っているということだった。
闇の魔力が最も強くなる闇月でなければ、アドラスティアを黄泉の国から呼び戻せないらしいのだ。
目が覚めたのが黒月――十月に入ってすぐだったから、闇月はもう目の前。
ためらっている暇などないのだ。
マリアと話していて、ほかにもわかったことがある。
それは見張りをしている子ども達はみんな、倫理観が希薄だということだ。
たとえば物を盗むことや、人を傷つけることを悪いことだとは思っていない。
命じられれば、やる。
命じられなければ、やらない。
判断基準はシンプルで、とても残酷だった。
私はクェーサーへの憎しみを深くせざるをえなかった。
本当だったら、彼らはまだ母親に甘えている時期なのに。
名付けたというだけで私に懐いてくれたマリアが愛おしく、そして切ない。
下民街にある銀星城に行った時も思ったことだ。そこには身寄りのない子ども達が、寄り添うように生きていた。

どうして子どもは皆、平等ではないのだろう？
自分では生まれる場所を選べない。
どの環境がよく、どの環境が悪いと断じるのは私の主観かもしれないが、それでも胸が深く痛むのだった。
――なんという偽善だろう。以前暮らした地球でだって、すべての子どもが平等というわけではなかったのに。

話をするたびに、マリアは饒舌になっていった。
ほかの子どもと交代する瞬間こそ大人しくしているが、足音が遠ざかると私のそばに座りこみ、様々な話をしてくれる。
私はそれに相槌を打つだけでよかった。
きっと彼女は、話を聞いてくれる大人に飢えていたのだろう。
「だからね、マリアは言ったの。リルに下手なことをしたら危ないんじゃないかって。クェーサー様が連れてくるぐらいだもん。リルはすごい人なんでしょ？」
話は、私の見張りをするグループの中でどんな話をしたか、という内容だった。
クェーサーの名前を聞き、私は心の中でピンと緊張の糸を張る。

「クェーサーは、マリア達にとってどんな存在なの？」
おそるおそるそう尋ねると、マリアはにっこりと笑って言った。
ここ数日で、ずいぶんと表情豊かになったものだ。
「クェーサー様はね、私達の救世主なの。大人の人達が、みんなそう言ってたよ。〝大陸のけがれたぶんめいを洗い流して、あたらしいちつじょをそうぞうする〟んだって」
明らかに意味をわかっていない言葉が、マリアの口からするするとこぼれた。
〝洗い流す〟とは、一体どういうことなのだろうか？
パールは、それが起こればメイユーズ王国どころか大陸全体が危ないと言っていた。
大陸には多くの国がある。アドラスティア一族はかつて大陸から排斥されたため、大陸を恨んでいるのだ。
背筋に不穏な予感が走り、私の体は震えた。
「リル、寒いの？　おふとん持ってこようか？」
マリアが心配そうに、私の顔を覗きこんでくる。
大丈夫だよ、と自分に言い聞かせるように何度もつぶやいた。
一日の大半を縛られて、床に転がされて過ごす生活にも、大分慣れた。
マリアが見張りについている時だけ、私は体を起こしてもらって多少の人間らしさを

取り戻す。
トイレに行ったあと、私は勇気を出してマリアにお願いしてみた。
「ごめんね、マリア。そっと縛ってもらっていいかな？　手首が擦れて痛くて……」
いくら仲良くなったとはいえ、彼女はアドラスティア側の人間だ。そう懇願することで、築いた信頼関係を失ったらどうしよう。
長くそんな風にためらっていたので、口に出した瞬間は心臓が破けそうなぐらいドキドキした。
マリアは不思議そうに私を見上げ、しばらく何かを考えている風だった。
しかしゆっくりと一度だけ頷くと、結びかけていたロープを解いてくれる。
「じゃあ、マリアが見張ってる間だけ外しておいてあげる。ね、特別よ？」
そう言ってにっこりと笑った彼女に、私の胸は罪悪感と喜びでないまぜになった。
「大丈夫？　お兄ちゃんやお姉ちゃん達に怒られたりしない？」
「大丈夫！　今日はマリア以外みんなお出かけしてるの。だからいつもより長くおしゃべりできるよ！」
マリアがそう言って身を乗り出した。私の鼓動がばくばくと鳴る。
――だとしたら、今日はこのアジトに私とマリアしかいないということか？

そしてそのマリアは、私に同情して手足の縄を外してくれるつもりのようだ。
監禁がはじまって、半月以上が過ぎた。
新しい体にもずいぶん慣れ、皮肉なことに充分な休息を取ることができた。
与えられる食事のおかげで、骨と皮だけだった体にもうっすらと脂肪がついている。
逃げるなら、今がチャンスだ。
闇月はもう迫ってきている。
――でも、そしたらマリアはどうなるの？
こめかみを、つうと汗が伝い落ちる。
短い間にもかかわらず、こんなに私に懐いてくれたマリア。
私を逃がしたと知られたら、彼女は無事ではいられないだろう。
子ども達を人とも思っていない集団だ。始末されても、おかしくない。
――どうする？　逃げるか、否か。
先延ばしにしていた決断を迫られていた。
いいや、覚悟はしていたはずだ。クェーサーの企みを成就させるわけにはいかない。
私は後ろ手をそっと床につけた。マリアからは死角になる位置に、指を置く。
そして爪で床板を削ってペンタクルを描こうとした、その時だった。

「お姉ちゃん？　何してるの？」
そう言って、マリアが首を傾げた。
「魔導を使うつもり？　お姉ちゃんの周りの魔法粒子が騒いでるよ」
ギクリと、体の動きを止める。
彼女が闇の属性だというのは、彼女の周囲に漂う粒子で知っていた。だから違う属性のペンタクルを使おうとしていたのに、気づかれてしまうなんて。
心臓がドクドクと高鳴る。
汗が顎を伝って落ちていった。
マリアは満面の笑みを浮かべて、口を開く。
「ねえ、お姉ちゃん……」

＊　✣　＊

黒月の初日、ミハイルはゲイルとともにステイシー邸に向かっていた。
リルが自室で眠りについたと彼女の契約精霊に告げられたのは、五ヵ月前。
クェーサーに関する調査が進展を見せ、何もかもこれからという時だった。

周囲の人間は驚き、気を揉んだが、白い巨体を現したリルの契約精霊が、今は見守るしかないのだとミハイル達に伝えた。そして緑の精霊が彼女の部屋への入室も禁じたのだ。

精霊達はリルがそうなった原因を告げることなく消え去り、そして今に至る。

この五ヵ月間、ミハイルは家に帰らず、メリスホテルに寝泊まりしていた。リルがはじめたメリスホテルにいる方が、実家にいるより心が落ちついたからだ。

馬にまたがりながらミハイルが思うのは、これから見舞う、およそ常識が通用しない子どものこと。ステイシー邸に行ったところでリルに会えはしないが、彼は時々、様子を見に行っていた。

リルという娘は、いつもミハイルの想像を軽く超えてくる。

四年前に面白がって王都に連れてきたはいいが、こちらは振り回される一方だ。

そう思いつつも、彼の口元に自然と浮かぶのは、寂しげな笑みだった。

娘のような、と言うのは大げさだが、十歳以上も年の離れた少女。

それなのに、思い出すと胸が震える。

婚約者を喪って以来、ミハイルは女性に嫌悪感を抱いてしまっていた。

なぜなら婚約者だったリルカは、ミハイルとの関係を妬む令嬢に呼び出されて事故死

したからだ。

以来、騎士団に入ったミハイルは、極力女性と関わらないように生きてきた。

リルだって年の差がなければ、そばに置かなかった。

退屈な馬上で、ミハイルは過去を振り返る。

過去とはいっても、ほんの数ヵ月前の出来事だ。

仕事で行った街トステオ。そこで出会った魔女マーサは、ミハイルを洗脳し、己こそが彼の婚約者たらんとした。

彼女の魔法は、ミハイルにとって居心地の悪いものではなかった。

騎士としての任務を忘れ、婚約者のフリをした魔女と暮らす日々。

それはミハイルが失った未来だった。

けれどリルによってその正体を暴かれたマーサは、ミハイルを道連れに死のうとした。

リルカの死んだ湖で。

それを体を張って止めたのもまた、リルだった。

途切れ途切れの意識の中で、ミハイルは確かに聞いたのだ。

『私が一緒に死んであげる』という、リルの叫び声を。

今、その言葉を思い出して感じるのは単純な怒りだ。

立ち読みサンプルはここまで

簡単に身代わりになろうとするリルに、そしてマーサに心を奪われていた自分に。
そして半死半生の淵を彷徨ったミハイルは、その湖でリルカと再会した。
あれが本物のリルカだったのか、それともそうではないのか、わからない。
ただ、彼女の死を悲しむばかりでは、リルカは決して喜ばないだろうということはわかった。
自分にそれを教えてくれたのはリルだ。
そして、ミハイルを無味乾燥な日々から救い出したのもまた、リルだった。
気がつけば、ミハイルはその少女を誰よりも大切に思っていた。誰よりも愛しいと思っていた。
だから残りの生涯をすべて懸けて、あの娘には恩返しをしようと思う。
それは義務感ではなく、ミハイル自身がそうしたいと強く願っているのだ。
もちろんこの先時が経てば、彼女は愛する人を得て、ミハイルを置いていくかもしれない。
けれど、それでもいい。
なぜなら、彼女からはもう充分に与えてもらったのだから。
あとは返すだけ。

そんな人生を、ミハイルは愉快に、そして楽しみに思う。
――だから、早く目覚めてくれ。リル。
切実な願いを胸のうちでつぶやく。
ステイシー邸に着くと、見知った使用人に手綱を預けた。
そしてミハイルはゲイルとともに屋敷に入る。
そこで待ち構えていたのは、ゲイルの奥方ミーシャだ。
彼女は愛する夫ではなく、ミハイルを見て喜びの表情を浮かべたあと、何かに気がついて片眉を上げた。
「あら、リルはご一緒ではありませんでしたの？」
そしてそのすぐあと、彼女からリルの目覚めと成長という衝撃的な事実を知らされたのだった。

ミーシャから事の次第を聞いたミハイルとゲイルは、ミハイルの実家とメリスホテルを駆け回った。しかし肝心のリルは、また姿をくらましてしまったらしい。
困った二人は、リルに手を貸したという時の精霊と人間のハーフ――王太子の側仕えであるベサミ・ドゥ・テイトを捕まえようとした。